

産経新聞 東京朝刊 2020/09/18(金)

台湾、「小国寡民」のこの島が自由と民主主義を擁し、高所得と高度技術をもつ存在として立国しているのはまさに稀有なことなのであろう。

大陸での国共内戦に敗れた国民党が台湾に敗走してこれを占領、国民党は中華民国の一部として国民党の支配下におかれ、そうしてこの中華民国が大陸を含む中国全土の正統的国家であるという虚構がついであられた。

李登輝元総統と民主化

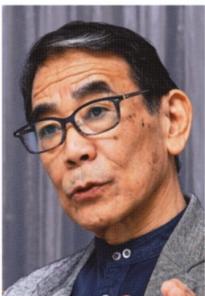
台湾は大陸との内戦状態におかれ、自由や民主主義などは無縁の專制政治が敷かれた。蔣介石の後継總統・蔣經国の急死により、台湾人（本省人）初の総統の座に就いたのが李登輝である。（しかし、大陸出身者「外省人」の力は弱く、李登輝への民主化への意思は容易に顯現しなかった。李登輝は1990年、初の総統選に臨み、頃きあかる者を中心とした國民から眞の總統へと変じた。ただちに「国是會議」を開き、民主化への最大の障壁「動員戡乱」が現れるべきことが提起された。）

大陸での国民党内戦に敗れた国民党が台湾に敗走してこれを占領、国民党は中華民国の一部として国民党の支配下におかれ、そうしてこの中華民国が大陸を含む中国全土の正統的国家であるという虚構がついであられた。

李登輝の心中にあったものは「脱中華民国」であり、「中華民国体制」という虚構からの脱却である。共産党を反乱団体とする規定を廢し、かつ自らの主権の及ぶところを台湾本島、金門、馬祖などの離島に限定した。共産党による大陸支配の容認でもあった。

李登輝氏の葬儀を前に考える

正論



拓殖大学学事顧問

渡辺 利夫

台湾の位置づけをより高める
（つづく画期が中台関係の「新定義」であった。1999年、海外メディアの取材に答えて、李登輝は次のように語った。「両岸關係は次のようにならねばならない。」）

台外交を担当する行政院大陸委員会の主任委員に就任、「二國論」「特殊な国と國の関係論」を定着させることに尽力した。

蔡英文は中華民国を否定して台湾独立を主張する「ティカルな独立派ではない。そうではなく、中華民国体制からの脱却をめざして政治的人生を紡いできた李登輝自身は、後年、いよいよ強く台湾の政治的ボジションについての思いを深め、「台湾共和国」として新憲法を制定すべしと主張するようさえなった。

中国の外交的、軍事的攻勢を前に臨み、頃きあかる者を中心とした國民から眞の總統へと変じた。ただちに「国是會議」を開き、民主化への最大の障壁「動員戡乱」が現れるべきことが提起された。

日本にとっての大いなる人物

冒頭、私は台湾という「小国寡民」の島が確たる存在として立国しているのはまさに稀有なこと

台湾だと語った。蔡英文の真意の在り處を伝える貴重なメッセージであろう。

李登輝の用語法が「中華民国在台灣」である。しかし、蔡英文の「中華民国台灣」においては、中華民国と台湾は同格であり、李登輝の用語法よりも台湾の位置づけをより高め、中華民国のそれをより低いものとしている。

蔡英文は本當は中華民国台湾ではなく「台湾」とだけいいたかったのかもしれないが、これでは中國はもとより国民党内強硬派からの猛烈な反発が避けられない。総統としての最大限の表現が中華民国のまわりはないが、これでは中國の新疆ウイグル、チベット、内モンゴルと同じく中国の圧政に苦しめられる国内の一省となっていた蓋然性が高い。中華民国体制は現在

台湾だったのであろう。

中華民国体制からの脱却をめざして政治的人生を紡いできた李登輝自身は、後年、いよいよ強く台湾の政治的ボジションについての思いを深め、「台湾共和国」として新憲法を制定すべしと主張するようさえなった。

中国の外交的、軍事的攻勢を前

に日本にとっての台湾の重要性は

いよいよ高い。李登輝という日本人にとっても大いなる人物の逝去の報に接して、日本政府によわが国人よ、台湾にもう少しの深い思い入れをもってほしい。9月19日に行われる。（わたなべとしお）

2020.9.18

オピニオン